

# 在日中国人児童の生活実態及び今後の課題に関する一考察

## —留学生支援者の報告書の分析から—

孫 暁 英

### はじめに

本研究の目的は、在日中国人児童生徒<sup>(1)</sup>の家庭環境及び学校生活の実態を明らかにし、異文化に適応する上での課題を検討することである。

1990年の出入国管理及び難民認定法の改正に伴い、多様な背景をもつ外国人児童生徒が両親と共に、日本に定住することになった。彼らは日本語ができないまま公立小・中学校に入学・編入し、教育現場に大きな影響を及ぼした。その対処として、教育現場で日本語指導・学校生活への適応指導などが行われてきた。現在では、外国人児童生徒の存在は珍しいことではなくなっている。しかしながら、今日でも、問題はまだ山積している。

各教育現場では、近年、留学生ボランティアを生かした支援活動という新しい動きが出てきた。本稿では、留学生による外国人児童生徒への支援活動の現状を明らかにするとともに、今後の課題について論じていく。その場合の具体的事例として、東京都荒川区を取り上げる。

荒川区では、「ハートフル日本語適応指導員」による48時間の日本語指導の終了後、さらに中国人児童・生徒のため、中国人留学生による言語指導・教科指導を48回行う。また、保護者に対しても留学生ボランティアがPTA活動の際に説明したり、保護者会などで通訳をするなどのフォロー体制を組んでいる。

当該事業は、ある中国人児童の来校に伴い、日本人教師や中国人留学生が2007年からボランティアとして活動を開始し、2年間支援活動を行ったことをきっかけとして始まった。本活動は、2009年に教育委員会によって正式に予算化され、現在まで、約50人の留学生が参加、5年間で約50人の児童を支援してきた。同じくマイノリティの存在としての留学生が主役になり、日本の教職員と協力して同じ立場の児童を支援し、教育現場の問題を解決している。母語でコミュニケーションができるお姉さん先生、お兄さん先生は児童が安心して信頼できる存在である。留学生が支援に来ると、待っていたように母語で話し、精神的にリラックスできる大事な時間になる。留学生のサポートによって、日本語が上達しただけでなく、友達とのコミュニケーションも取れるようになってきた。また留学生も児童も異文化の中で共に成長した。

筆者はかつて拙稿において、支援活動に参加する留学生に注目し、在日中国人児童の支援活動における留学生の役割として、児童の心のケア、適応指導・学習指導、通訳活動を通してのパイプ役など

があることを論じて、分析した。さらにそれと同時に留学生自身が支援活動を通して自分自身を省察する機会であることも指摘した。

一方、中国人児童に関する研究は、データを得る難しさもあって、必要性が言われながらも十分な蓄積がなされているとはいえない。そこで、本稿は在日外国人児童に焦点を当てていくが、データとしては直接子どもに接し、支援に参加していた留学生の目から見た児童の日々の様子及び変化の実態についての報告書を資料として検討していくものとする。児童のリアルな姿が浮かび上がってくる報告書であり、貴重なデータと考えることができよう。本稿は、今後の外国人児童への支援活動の改善につながることを期待される。

本稿の構成は以下の通りである。第1章では、先行研究を整理する。第2章は、本調査の概要について述べる。第3章は、児童の実態調査の調査結果である。第4章は、家庭教育、学校教育及び留学生支援の位置づけについて考察し分析する。最後に、本稿のまとめと今後の課題について論じる。

## 1. 先行研究

外国人児童生徒教育に関する先行研究は、概ね四種類に分けることができる。まず、社会・教育政策の動向に関する研究である。例えば、斉藤（2012）は外国人児童生徒教育の歴史を概観し、政策の動向と展開を整理した。

次に、日本語教育に関する研究で、例えば、川上（2009）、（2010）など数多くの研究がある。川上は、外国にルーツを持つ子ども、つながりを持つ子どもに対して、「移動する子ども」と名付ける。「移動する子どもたち」とは、空間的に越境するだけでなく、言語間も「移動」する子どもたちをいう。

それから、学校教育における研究で、例えば、白井（2011）、松尾（2011）などがある。松尾は、日本の学校教育は外国人児童の言語的なニーズに応え切れておらず、学力問題はいまだに深刻であるとしている。とくに、外国人児童生徒の長期的支援の視点に立った在籍学級における効果的な授業づくりは課題が残されていると指摘した。その解決策として、松尾は米国のESL教育ではよく知られている指導方法の一つ、CALLA（Cognitive Academic Language Learning Approach）モデルによる授業づくりを提唱した。

さらに学校教育と家庭教育の関係に関する研究としては、山田・庄司（2012）などがある。山田・庄司（2012）は外国人児童生徒への有効な指導・支援を実現するため、Bronfenbrenner（1979）の生態学的発達理論に基づく学校と家庭の協働を提案した。

上述のように、先行研究には理論研究は多いものの、留学生の視線で実際に子どもの様子を観察し、子どもの悩みや異文化コミュニケーションにかかわるストレスなどの現状に対する分析はまだ少ない。そして、学校現場で何が起きているのか、子どもたちは実際に何に困っているのか、現場の教師たちはどのように対応しているのか、現在でも十分に把握されているとはいえない。森田（2011）は、時間をかけて綿密なフィールドワークによって、地に足の着いた現場のニーズを知ることから始める必要があると指摘した。

荒川区では平成 24 年度に筆者を含む 16 名の留学生が一年間に渡り小学校で支援活動を実施してきた。そこで、本研究は長期間の支援体験を通しての貴重なデータから、分析を行っていくものとする。

## 2. 調査概要

在日中国人児童生徒の実態を把握するため、平成 24 年度の留学生支援報告書の検討を行った。さらに支援活動に参加した留学生へのインタビューを実施した。まず、予備調査として、8 人にインフォーマル・インタビューを行い、次に、本調査を実施した。必要に応じて更に詳細なる項目についてフォローアップ・インタビューを行った。

### 調査目的

留学生が支援をしている在日中国人児童の学校生活の実態について明らかにし、今後留学生支援活動を効果的に実施するための参考資料を得ることを目的とする。

### 調査協力者

平成 24 年度、支援活動に参加した留学生は延べ 16 名で、本調査の時期に 7 名が帰国したため、そのうち 9 名が本調査に協力した。

表 1 調査協力者の概要

年齢	所属	支援校	支援期間
20 代 (22～29 歳)	大学 4 年生及び 大学院生	五峽田小学校、ひぐらし小学校、赤土 小学校、尾久西小学校	2012 年 4 月～2013 年 3 月

### 調査協力者の特徴

- ① 一年間短期の交換留学が多い。留学中の貴重な経験として、小学校で支援に参加する。
- ② 20 代の女子大学生が多い。子どもにとって親しみやすい存在であり、ロールモデルでもある。
- ③ 特に荒川区日中友好協会が推薦する学生が支援活動に参加している。

### 調査実施期間

平成 25 年 1 月～3 月

### 調査項目

表 2 質問紙の調査項目

問 1	子どもの家族構成及び来日時の日本語能力
問 2	子どもの様子（授業中、給食など）

問3	子どもの変化
問4	周りとの関わり方の変化
問5	日本での生活が円滑に行うため、外国人の子どもに必要な最低限なものは？

(本稿で分析に使用した項目のみ抜粋)

### 研究倫理の問題

児童の個人情報を保護するため、調査では名前を記入しない。調査協力者を特定できないように、取り上げた児童の情報は小学校名も省略した。

## 3. 調査結果

### (1) 児童の家庭状況

調査を通じて、7名の情報が得られた。基本情報は以下の通りである（表3参照）。

表3 児童の基本情報

	性別	何年生	中国の出身地	国籍	来日年月
A	男	2年	上海	日本（父親日本人）	2011年4月
B	女	1年	福建省	中国	2012年4月
C	女	1年	福建省	中国	2011年6月
D	女	2年	福建省	中国	2012年6月
E	女	3年	東北	日本（父親日本人）	2011年4月
F	女	3年	福建省	日本（両親とも中国人）	2012年4月
G	男	6年	上海	中国	2012年9月

表3のように、児童の特徴は以下の通りである。

- ①性別から見ると、低学年の女子が多い。7名中、女子は5名いる。女兒にとって、女子留学生は心を開きやすく、話しやすい。それに対して、クラスの児童に対しては積極的ではないので、なかなかコミュニケーションがとれず弱い立場でもある。
- ②出身地から見ると、福建省を始め、上海、東北地方の出身である。中国沿海部の出身が多い。特に福建省では伝統的に海外へ出稼ぎして、自分たちの生活を維持するという要素もある。地理的にも近く歴史的にもつながりを持っている地方は、現在でも日本との交流が盛んと言える。
- ③国籍から見ると、日本国籍を取得した児童が5割弱を占めている。両親が国際結婚の子どもも二人で、三分之一を占めている。これらの子どもたちは、親の生活基盤で永住或いは定住化していく傾向が強いと言える。
- ④来日の時間が半年又は二年など、まだ非常に短い。日本語を始め、日本文化・社会に適應するころはまだ難しい。

また、このような児童はいかなる家庭環境の中で育てられてきたか。また日本語能力・コミュニケーション能力がどれくらいかを合わせて調査した。その内容を子どもの家族の構成及び来日時の日本語能力についてとしてまとめた（表4参照）。

表4 子どもの家族構成及び来日時の日本語能力

	家庭状況	来日時の日本語能力
A	父は日本人、会社に勤めている。母は中国人でアルバイトしている。三歳年上の兄（日本語能力あり）と四人家族。	最初は日本語があまり聞き取れなかった。担任の先生の言うことも十分に理解できなかった。授業を聞いても分からない状態だった。クラスの友達ともコミュニケーションできなかった。
B	両親とBさん、三人家族。	最初は簡単な挨拶ぐらいできる。支援の開始後、何か月かで転校した。
C	両親と子供、三人家族。父親は印刷会社に勤めている。母親は専業主婦。	中国で日本語を勉強した。簡単な会話ができる程度で、教師の言うことは聞き取れていなかった。
D	両親とも中国人で、自営業をしている。日本語はあまりできない。	支援をはじめた時、かなり日本語が理解ができ、授業もスムーズに聞き取れていた。時々分からない言葉があった様子である。
E	父は日本人であるが、すでに亡くなったようだ。母は中国人で、弟、妹の四人家族。	日本語は大体の意味が分かったが、ある時は内容を誤解したりすることもある。先生の言うことも勘で当てたりする。授業の内容は深くは分からない様子がみられた。
F	日本で生まれ、4歳の時、中国に帰った。10歳まで父親と兄二人と中国で生活していた。去年日本で暮らしていた母に呼び寄せられ、来日。母と2人で日本で生活している。母親は飲食業で働いている。	この子には記憶はないが、母親の話によると、4歳まで幼稚園の時、日本語ができていた。中国に帰ったら、全部忘れた。来る前に日本語を勉強することはなかった。
G	両親は中国人で、日本留学の経験があり、二人とも現在会社員。母親の方は海外出張が多い。親戚も何人か日本に住んでいる。	5歳の時、日本に遊びに来たことがある。日本語ヒアリングは大丈夫だが、話すことと書く能力はまだ低い。

表4のように、子どもたちの家庭状況及び家族構成について、以下がわかる。

- ①核家族と大家族の二種類に分けられる。父は自営業、会社員が多く、安定しているようであるが、一方ではアルバイトに頼りながら、生活を維持している不安定さもある。経済状況はあまりよくなく、低収入の階層になっている。
- ②国際結婚の場合、父親が日本人、母親が中国人のケースが一般的である。逆のパターンは今回の調査では見られなかった。
- ③家族関係が複雑である。家族離れ離れで、日本と中国とで別々に住んでいるケースもある。親の都合によって、子どもの生活だけでなく心の不安定さも見られる。
- ④日本人の父親が逝去し、母親だけで異国において三人の子どもを育てている例もある。生活が極めて困難であることが推測できる。

このように、大部分の外国人児童生徒は低収入の中で安定しない家庭環境の中で育てられている。しかも、家族関係が複雑で、親の仕事が多忙などの諸事情により、子どもたちが十分な愛情と家庭教

育が受けられない状況であると言える。

また、来日当初日本語のレベルについては日本に来る前にほとんど勉強したことがないことが分かり、そして両親も日本語を話せないまま仕事に就いているケースもある。家庭の中で、日本語を話す環境がないと言える。したがって、中国人児童にとってコミュニケーション能力を高めること、学習に関する日本語の習得は学校生活にしかない。そのため、学校教育は外国人児童生徒に対して極めて重要である。次節では、学校生活を取り上げる。

## (2) 学校生活

日本の学校と「本国」の学校において、教学内容や難易度が一致していないことは大きな問題である。「本国」では小学校から教科制であるが、日本では専科以外すべて担任制である。そのような環境の中に、児童は入っていく。そのやり方に違和感もある。表5は学校の日常生活・学習の様子をまとめたものである。

表5 学校生活の様子

項目	内容
児童の様子 (授業中、給食など)	<p>A：学校で友達がたくさん出来ていた。真剣な学習態度で、特に算数が得意である。</p> <p>B：算数の授業も国語の授業も一所懸命にやっていた。特に、算数が得意である。</p> <p>C：授業に集中しない、孤独感が強い。(それは言語が理解できなかったからである。)</p> <p>D：授業でかなり日本語ができるタイプで、クラスメートと同じペースで授業を受けることができる。勉強意欲が強く、真面目である。</p> <p>E：理科系の授業は大体理解できるが、国語は理解できない。日本語ができないせいで、友達はあまりできない。他人に対するマナーや思いやりが少ない。</p> <p>F：授業を受けるときに、算数の場合は積極的に参加できる。しかし、国語の授業に興味あまりないので、時々、隣の子どもに話をかける。授業中の質問にあまり答えられない。人前で日本語を言いたくない。給食時に、他の日本人の小学生とあまり交流しない、ただ食べるだけである。</p> <p>G：賢く、反応が速い。自分の考えをきちんと持っている。試験の成績も悪くない。</p>
子どもの変化	<p>A：国語のプリントをやった時に、漢字の意味がわからないところがあったが、学習することによりその問題も次第になくなった。日本語も上手になった。</p> <p>B：はじめて支援に行ったとき、あまり話をしなかった。何を聞いても、ただ私を見て黙っていた。何回かの支援活動の後、仲良くなってきて、よくいろいろ喋ったり、遊んだりした。授業中も自信を持って手を上げて先生の質問に答えるようになってきた。</p> <p>C：日本語が上手になった。それと共に周りの人にもやさしくなった。</p> <p>D：支援者の先生が自分の側にいることで、安心したように、笑顔が多くなった。</p> <p>E：授業の内容なども積極的に学ぼうという姿勢になった。日本語の発音の部分はほとんど問題がなくなった。授業で発言できるようになった。</p> <p>F：簡単な学校用語が話せるし、話したいことを先生にも表現できる。日本人の小学生と友達になり、日本語に対する興味が出てきた。性格も明るくなった。</p> <p>G：クラスに溶け込み、授業で発言するようにもなった。</p>
周りとの関わり方の 変化	<p>A：性格が明るくて、誰からも話しかけられ、友達と仲良くやっていた。</p> <p>B：学校の先生と学生はとても優しいし、Bさんのことに関心を持って、Bさんと友達になって、たくさんの手助けをしてくれた。日本語のレベルが高くなるとともにBさんの友達も多くなってきた。休みのとき、みんなと一緒にゲームをやっているときはとても楽しそうだった。</p> <p>C：最初クラスメートと交流が少なかったが、だんだん仲良くなってきた。</p>

	<p>D：クラスの子どもたちも支援の留学生先生に話しかけてきた。中国語の発音を教えてもらったりした。その中でDが中国語もできることに気づくようになった。そして、支援者を通してDとクラスの子どもが仲良くなっていった。</p> <p>E：留学生支援者の意見が分かれている。</p> <p>①日本語も、マナーもよくなったので、周りとの関係は良くなり、友達ができるようになった。</p> <p>②周りは相変わらず、あまり好意的ではなかった。お友達がたくさんできるようにと祈っているが、現状ではなかなか難しいようである。あまり友好的な雰囲気ではなさそうである。</p> <p>F：先生や友達と日本語で交流できるし、日本人の友達と互いの国の言葉を教え合い学び合っていた。日本の食べ物や環境などに慣れてきた。</p> <p>G：先生とクラスメートに話しかけたり、遊んだりするようになった。表情も明るくなって、たまに授業中いたずらする余裕も出てきた。</p>
エピソード (面白いこと或いは困ったことなど)	<p>A：A君がテストをやっていたとき、支援者が言葉の意味を助けようとしたら、いらぬと言って、自分でテストを一生懸命受けた。毎回A君の支援を終えて、担任の先生とクラスの全員が「ありがとうございました」と言ってくれて、尊敬されている感じ。</p> <p>B：ある日、私は動ける折り紙の鶴を折って、Bさんにあげた。Bさんのクラスメートがそれを見て欲しそうにした。私はもう一つ鶴の折り紙を折ってその子にあげた。そのとき、Bさんが怒って「彼女が好きなら、姉さんは彼女に日本語を教えに行けばいいじゃん」と言われた。焼きもちを焼くような様子を見ました。面白かったし可愛いとも思った。</p> <p>D：休憩時間にDのクラスメートに声をかけて、ちょっとお話しをしていたら、Dはすぐ自分のほうに注意を引くように、見てなどと言われたことがある。やはり自分だけの先生であることを意識しているようである。</p> <p>E：学芸会の出演の当日、Eも他のクラスの子どもたちも頑張っている様子を見て、私の気持ちは明るくなって、楽しかった。</p>

子どもたちは言語生活が不自由であり、学習においても困難が多いが、共通して算数は得意である。その主な理由は、一つ目が、日本と中国のカリキュラムの違いである。例えば、日本に編入された場合、中国ではすでにその学年において前学年で習得している。二つ目としては、概ね算数には言語ではなく、数字で答えることが多い。しかし、応用問題になると躓いてしまう。そこに言語という壁がある。言語習得の問題として、国語を始め、社会などの教科は難関である。その反対に、子どもたちは常に周りを見つめ、興味関心を持ち、情報をキャッチする能力に優れている。また、全体に子どもたちは学習意欲があり、何でも見て挑戦したり、考えたり、学習態度も真面目である。

最初、クラスの中では一人で、隣の子に話かけたり、先生から話しかけられたりする中で、少しずつ友達の幅も広がった。生活用語の習得に伴い、日本の学校生活に慣れてきた。日本語のレベルが高くなるとともに友達も多くなってきた。学校生活または学級生活では、人間関係がとても重要で、日本式のマナーを知らない日本の友達の中に入りにくい。

表5で、特に問題と思われるのはEさんの例である。中国人の母と日本人の父、日本人の父親に早く死なれて、現在は母親がアルバイトしながら、三人兄弟の世話をしなければならない。このような家庭環境ではなかなか自分が出せない。また、周囲の雰囲気も改善されていない。今後も家庭環境に注意しながら、保護者と話しあう支援も続けなければならない。

このような、家庭的な愛情に恵まれない子ども、集団不適應の子ども、その一方、賢く明るい子ども

も、クラスに溶け込み、人気のある子どもなど、個々の家庭環境や社会階層、知的能力、適応能力などは、それぞれ異なっていた。

### (3) 児童にとって必要な資質・能力

支援に入っている大学生に対して「日本での生活を円滑に行うため、外国人の子どもに必要な最低限なものは」という質問をした所、回答は以下の通りである（表6参照）。

表6 子どもにとって必要な資質・能力

分類	内容
モノ	小学生用の日中辞書、日中対照の本（中国語のお話の本）
ヒト	友達
チカラ (教養, 躰, 品格, 人間性)	礼儀やマナー, 他人に対する感謝の気持ち, 異文化を受け入れる態度, わがままにしないこと, 郷に入って郷に従え, 勉強の向上心, 異文化に対する興味など

留学生は友達の大切さを述べた。「友達は一番大切なことだと思います。外国なので、言葉も分からない、慣れた生活も完全に変わりました。友達がなかったら、きっと寂しく思えます。友達があり話し合うことができれば、新しい生活に早く慣れて、円滑に進みます」。また「積極的に現地の人と接触するのが一番大事だと思う」という意見や、「郷に入っては郷に従え」、「周りの子と同じように行動し、わがままにしないこと」などの意見もあった。

外部の要素としての「モノ、ヒト」よりは、子ども自身の内面、つまり態度、資質、能力が求められている。勉強の向上心、異文化を受け入れる態度、他人に関する感謝の気持ちなどが重要である。

以上のように、在日中国人児童はさまざまな背景を持ち、困難に直面している。日本語の問題だけで解決できず、言語支援を始め、文化支援及び心理支援の必要性が求められている。次節では、家庭教育の役割、学校の変容及び留学生支援の位置づけについて考察する。

## 4. 考察

### (1) 家庭教育の役割

外国人児童生徒の問題は日本語の問題だけで片付けてしまうことが多いが、今回の調査では、言語は環境の中で時間をかければ自然に習得していけることが明らかになった。それよりも、家庭環境の影響が大きいということが留学生の報告書及びインタビューから浮かんでくる。

森田（2011）は、外国人児童の不適応は、言語・文化的背景の違いに起因する部分も含まれるが、個人的・家庭的背景の違いに起因する部分とも多重に絡み合っていると指摘した。外国人児童の両親は、正規雇用ではなく、生活水準が低く、経済状況が厳しい。また、両親の日本語能力が低く、子どもへの指導ができない。さらに親は子どもと交流する時間が少なくなっている上、生活をする上で手一杯であるため、子どもが学校に就学後は、教育は学校と教師に任せている。親たちは日本の学校

の様子分からないため、指導できない。家に帰ったら、独学させるしかない。他方、それと同時に、中国語を忘れないように、中国の学校の教科も勉強させている。

このように、行政を始め、社会全体に関心をもつよう呼びかけ、子どもの親が就労しやすい環境を作ることが必要である。また、外国人のシングル家庭の親に対して特別な子育て支援体制を完備することも重要だろう。

## (2) 日本の学校の変容

日本の学校は、転入生が入ると日本人であろうと、中国人であろうと、全校朝会で全児童に校長先生が紹介する。そこで、特に外国人の場合は大きな拍手で迎えられ、学校の中でその子の存在が位置付けられる。また、留学生の支援者も、職員に紹介される。このような中で、クラスでは外国の子どもたちを受け入れることにより、国際理解、異文化コミュニケーション能力を鍛えるチャンスである。日本の子どもにとっても、それは、外国を知り、外国人を受け入れ、相互理解するいい機会である。互いに学びながら、互いに成長が導かれることで、国と国との友好も芽生えていくのではないだろうか。

在日外国人の児童は、日本人児童と同じく日本社会の一員である。異文化の中で育つ、その子どもの時代に学校に適応できず、心理的な問題などを抱えながら成長していくと、大人になっても社会になかなか適応ができにくい場合がある。日本の未来の担い手の一員でもある外国人児童も平等に教育を受け、知識や学習能力を高めていけば、将来的に社会の安定や発展につながると考える。

## (3) 留学生支援活動の位置づけ

宮地（2011）は、「以前は適応のためになるべく早く移住前の国のことを忘れ、新しい国のものを取り入れたほうが良いという考え方もあったが、そう簡単には人間は切り換えることはできないし、新しいことをしながら、ちょっと疲れたときには体に馴染むような場があることが大切と考えられる」と指摘した。子どもが心理的に弱くなった場合、落ち込まないでいるために支えが必要である。それゆえに、留学生は子どもの成長を支える「仲間」の存在としてとても重要な役割を果たしている。留学生の支援により、子どもたちは元気をもらい、プラスの方向へと変容している。

学校の中で、校長や担任は支援者である留学生に対して礼儀正しく対応している。あるいは日本語が上手などと言葉をかけられることで、留学生は自己肯定感ややりがいを得ている。学力向上や学習意欲にも繋がっている。このような環境では、子どもの日本語の言語能力の成長も早く、留学生もやる気に満ち溢れていた。

ある留学生は「6か月しかない支援活動は子供に日本語を教えるだけではなく、自分自身も勉強になることが多い。最初に日本に来た時は中国とは違う世界で生きられるかどうかまで心配し、心細かったが、9歳の彼女と一緒に勉強したり、心配事を教えてくれたり、日本でも自分が守るべき人がいることに元気をもらった。必ずしもうまく進んできたわけではないが、多くの困難を乗り越えて、

彼女の力になったことが一番嬉しかったことである」と自分の支援経験を語った。支援活動の魅力はここにあるのであろう。

留学生たちは「大学の時間が忙しい」、「活動場所まで遠い」などの障害要因を克服し、支援活動に参加し続ける。留学生は、子どもにとって家庭・教科以外の居場所で母語を話せる存在である。また、支援活動は心を開く場であり、仲間意識を持つ場所でもあるようだ。支援者にとっては実際の日本の教育現場に入ること、日本人教師と話をしたり、考え方を交流する場でもある。彼らにとってもなかなか経験できない大きな体験である。最後に、この支援活動は、荒川区及び荒川区教育委員会の国際化に対する理解の表れでもあるだろう。

## 終わりに

本研究では、留学生支援報告書の分析及び支援留学生へのインタビューを通して、在日中国人児童生徒の家庭環境及び学校教育の実態を明らかにした。これによって、今後、支援のあり方や学校の外国人の子どもに対する指導体制のあり方を検討することが可能になるのではなかろうか。

留学生ボランティアは、学校と協力しながら、子どもの視点に立ち子どもたちの成長を見守り、言語を始め、学校生活及び異文化適応指導などをサポートしてきた。その結果、子どもたちの言語能力及び社会適応能力の発達を促進した。人との出会いと絆を大切に、この支援活動にかかわるすべての人にとって、いろいろな気づきや、グローバル化の中で人と人の往来の新たな展開のきっかけになっている。

今回の調査ではボランティア活動に対する満足度は高く、児童生徒、教職員との関係は概ね良好であったが、問題も残っている。外国人の長期化・定住化が進む中、マイノリティの外国人児童生徒こそ、特に支援の充実が必要である。その支援は一連の連続性を持つものであり、密接な連携が必要である。外国人児童生徒の長期的な支援の視点に立ち、教育実践の組織化、専門化、在籍学級における効果的な支援をどのように行うかという課題が残されている。

グローバル化が進む中で、今後、国・行政・地域が計画的な方向性を持って検討すべき問題であると考えられる。

注(1) 本稿では、白井(2011)に従って、「在日中国人児童生徒」とは、①中国籍の児童生徒、彼らの両親が中国人で短期間或いは長期間日本で働いている、日本で生まれ或いは両親に連れられた。中国を離れて、国籍は変わっていない。②国際結婚で、母親が中国人で、父親が日本人である。逆のケースが少ない。日本国籍を取得している。③日本に帰化し、または永住権を持ち、ほとんど中国に帰らない子ども。

## 参考文献

- 白井智美(2011)「外国人児童生徒の指導に必要な教員の力とその形成過程」大阪教育大学紀要 第IV部門 第59巻 第2号 73～79頁
- 川上郁雄(2009)『「移動する子どもたち」の考える力とリテラシー—主体性の年少者日本語教育学』, 明石書店
- 川上郁雄(2010)『私も「移動する子ども」だった:異なる言語の間で育った子どもたちのライフストーリー』,

くろしお出版

斉藤泰雄（2012）「外国人児童生徒の教育をめぐる政策論の動向と展開」国立教育政策研究所紀要 第141集, 233～246頁

孫曉英（2012）「在日中国人児童の支援活動における留学生の役割—東京都荒川区を事例として」早稲田大学教育学研究科紀要別冊20号-2, 37～48頁

高田恵美子（2012）「本学科学学生のボランティア活動に関する一考察—ボランティアの自主性と教育的効果」関西女子短期大学紀要第22号1～11頁

松尾知明（2011）「外国人児童生徒と学力保障—CALLAモデルによる授業づくり—」国立教育研究所紀要 第140集211～221頁

宮地尚子（2011）「外国にツールをもつ家族と子どものケアに必要な視点」『アジア・太平洋人権レビュー 2011 外国にルーツをもつ子どもたち 思い・制度・展望』6～20頁

森田京子（2011）「ブラジル人児童と多様化する教室のマイノリティー」『多文化社会日本の課題—多文化関係学からのアプローチ』明石書店, 79～99頁

山田有芸・庄司一子（2012）「外国人児童生徒教育における学校と家庭の協働—生態学的発達理論に基づいて—」筑波教育学研究 第10号51～66頁